

Sam Briggs の 中国語訳

渡辺浩司

1

1914年7月、オーストリア・ハンガリー帝国皇太子夫妻の暗殺をきっかけに、同国がセルビアに宣戦布告したことから、それぞれの国を支持し、対立していた他の欧州諸国間でも戦端が開かれ、第一次世界大戦が始まった。戦争が長引くに連れて、イギリスやアメリカではそれを題材にした小説が現れ、更にはその中国語訳が見られるようになった。清末民初を代表する小説雑誌の一つ《小説月報》(商務印書館)にもその種の小説が掲載された。特に同誌は、当時の編集責任者、惲樹珏が自ら訳した《與子同仇》(同誌第七卷第二号,1916年2月25日 - 筆名“鐵樵”を使用)の末尾に“本報今注意逐譯歐戰小説。(本誌はこれから意を持って欧州大戦の小説を翻訳する。)”と述べるほどであった*1。

その惲樹珏が、《與子同仇》と同様に、同誌第七卷第二号に1篇、そして第三号に2篇、第一次世界大戦を扱った短篇を自ら訳し、掲載した。

この度、その原作が判明したので、本稿で報告する。

3篇とも原作者は同じで、原作はイギリスの雑誌『The Strand Magazine』(George Newnes,Limited)に12回に渡って連載されたシリーズの3回分である。

原作者は、Richard Marsh、本名Richard Bernard Heldmann、1857年生、1915年没、イギリスの作家で、ジャーナリストでもあった*2。

原作は、『Sam Briggs Becomes a Soldier』シリーズ中の3篇で、中国語訳と併せて以下に示す。

中国語訳	原作
吾血沸矣	Sam Briggs Becomes a Soldier
獻身君國	Sam Briggs Becomes a Soldier . A Man in the Making
戰事真相	Sam Briggs Becomes a Soldier . Baptism of Fire

同シリーズは、Strand誌Vol.49-No.289(1915年1月)から毎月掲載され、Vol.50-No.300(1915年12月)掲載の第12回で終了した。連載終了後、単行本になり、『Sam Briggs, V.C.』という書名で1916年に出版されている(未見)。ここで、中国語訳が拠ったのは雑誌か単行本かが問題になるが、実見できたのは雑誌のみなので、中国語訳は雑誌から翻訳されたとして論を進める。

なお、Sam Briggsを主人公にした物語は、これ以前にも存在しており、1912年に単行本『Sam Briggs』として出版されている(未見)*3。

以下、これら3篇について、中国語訳掲載順に述べる。

2 《吾血沸矣》

くり返すが、原作は『Sam Briggs Becomes a Soldier』(シリーズ初回で、副題は無)で、Strand誌Vol.49-No.289(1915年1月)に掲載された。

中国語訳《吾血沸矣》は、《小説月報》第七卷第二号(1916年2月25日)に掲載され、書名下に“本Sam Briggs Become a Soldier”とある。訳者は“冷風”と“鐵樵”。 “鐵樵”は上述の通り、同誌編集責任者でもあった憚樹珏で、原籍は江蘇常州、1878年生、1935年没。“冷風”は未詳*4。

原作は、新聞社に勤める主人公Sam Briggsが志願して入隊するまでを描き、全編を通じて主人公の一人称で語られている。あらすじを述べる。

私(Sam Briggs)は、国際情勢に関心を持っていなかった。そのうち、オーストリアがセルビアに、そしてロシアがオーストリアに、そしてドイツがロシアに宣戦した。するとフランスもロシアの味方として割り込んだので、ドイツはフランスに宣戦し、フランスを攻めるため、ベルギーに侵入しようとした。そして、イギリスがベルギーの友人としてドイツに警告したが、無視され、ドイツはベルギーを攻めた。我々は喧嘩を売られて引き下がるような国ではない。

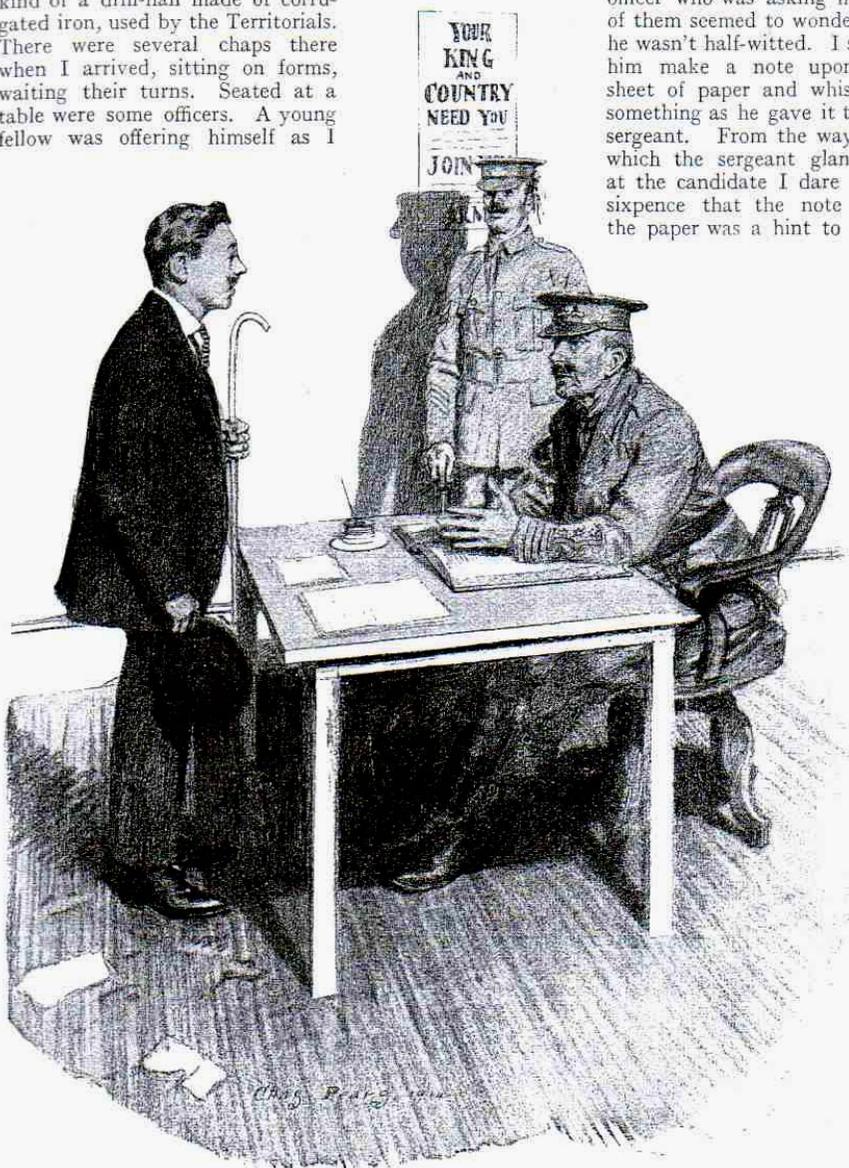
ドイツと戦争になったのを知った時、世界のすべてが失われていくように感じ、私はまずお金を節約した。通りでは新聞売りが、北海で海戦、ドイツ艦が沈んだと

SAM BRIGGS BECOMES A SOLDIER.

to begin by perhaps being turned down in my own district.

It was pretty early when I got to Camberwell, but I wasn't the first there by a long way. The recruiting station was at some kind of a drill-hall made of corrugated iron, used by the Territorials. There were several chaps there when I arrived, sitting on forms, waiting their turns. Seated at a table were some officers. A young fellow was offering himself as I

came in. He was a big chap, quite six feet high, with a great, broad chest. He made up for his size by being without brains. Very stupid he was at answering the questions which were put to him. The officer who was asking most of them seemed to wonder if he wasn't half-witted. I saw him make a note upon a sheet of paper and whisper something as he gave it to a sergeant. From the way in which the sergeant glanced at the candidate I dare bet sixpence that the note on the paper was a hint to the



“ARE YOU AWARE, SIR,” HE ASKED, “WHAT IS THE MINIMUM HEIGHT REQUIRED FOR A CANDIDATE FOR THE ARMY?”

叫び、人々が争って新聞を買っていた。1時間後、それは誤報だとわかった。私は自分の勤めにもかかわらず、最初の数日はこんなニュースが飛び回るから、新聞は買わない方がいいと皆に言った。前週は幸せに暮らしていたのに、週が替わると、すべてが戦闘・殺人等の話に変わった。私の父は、平和を好む人だったが、戦争が始まるや、言動が変わってしまった。ある日の朝食時、父は、志願兵になりたいと申請したが、年齢を理由に断られた等と話した。母は、そんな話を子供の前でしないで、悪い見本を子供に見せないで、と言った。私は母の言葉の意味を考えた。私は背がとても低く、とても丸々としているが、日常では気にならず、自分のことは自分でどうにでもなると思っていた。しかし、自分の身体を知り合いの軍曹と比べてみると、兵士には向かないと思い、憂鬱になった。新聞では兵士募集の巨大広告が見られるが、なれそうもないと思った。

私はBill Edwardsに出会った。憂鬱なので、何も話さず通り過ぎようとしたが、彼は声をかけてきた。彼が「行くぞ!」と言うので、週末に保養地にでも行くのか等と聞いた所、彼は鼻で笑い、前線に行く等と答え、皆がどこかに行って何かをすべきだ、ドイツの侵略を考えるだけで血が熱くなる等と言った。もしそんなことが起これば、自分も怒りで叫ぶだろうと思った。

婚約者のDoraの家にいた時も、話題はすべて戦争のことだった。Doraの兄、Tomが新聞の兵士募集広告を見て、自分に向けて言っているようだ等と話すと、母のMrs.Wilkinsonは、Tomは一人息子であり、自分は夫と死別しているのだから、そうではないと否定した。Tomは、そこが問題だと言い、自分は兵士になり戦場に行くべきなのか、家に留まり工場の生産を守り続けるべきなのか、家に留まれば兵役忌避者として罵られるだろう等と話した。Mrs.Wilkinsonは、誰も非難しない、Tomは一家の大黒柱なのだと言った。Tomは、兵士になって国への義務を果たすという自覚はあるが、母への義務はどうなるのか等と言うと、Mrs.Wilkinsonは、イギリスが危機に陥った時には、Tomにもドイツと戦うよう言うが、今はまだその時ではない、イギリスのために工場を稼働させ続けるべきだ等と話した。そこに、Doraが加わり、Sam(私)のここ数日の変化、落ち着かない様子、に気付いている等と話した。私は、ドイツが来襲しようとしているのにじっとしてられない等と話に加わった。Doraは、銃を持ったこともないのに、ドイツを止められるのかと聞いてきたので、私は、お祭りでの射的の腕前はすばらしかったと言い、Tomも認めてくれた。更に、私は、周囲が心配するほど無我夢中の調子で、最近の自分のこと

を語った：自分には始終「ラッパの響き」が聞こえ、できることを何かしなければならぬ；緊急に兵士が募集されているので、銃の扱いは2週間の教練で学べるだろう等等。私の話を聞いて不安がるMrs.Wilkinsonに、Doraは、来月の予定だった私との結婚をこの戦争が終わるまで延期すると言い、その上、志願を決めた私に誇りを持っている等と話した。

その後、私たちは場所を私の家へと移し、私の両親、姉(妹)LouisaとMrs.Wilkinson、Dora、Tomそして私が一堂に会した。父は、私に愛国の気持ちが流れているのを喜んだ。母は心配し、父に向かって「前にあなたが軍務に志願した等と言ったから、Sam(私)が動揺した；いい仕事に就いているのにこれで台無しだ」等と責めた。父は、戦争が終わるまで職場での地位は空けておいてくれる等と言ったが、母は、いくつかの部隊が大損害を受けたと昨日聞いたばかりで、Sam(私)の部隊がそうなれば仕事も何もない、そしてSam(私)は唯一の息子なのだとした。私は、母に、20人出征したうち、19人は無事に帰ってくるし、どの兵士も助かるために戦う、と話した。父が、いつ志願するのかと尋ねたので、私は、機会があれば真っ先にすると答えた。

翌朝、私は志願が受理されるまで帰らないと決心し、誰にも何も言わずに家を出た。ただ、受理されず、知り合いに笑われるのを避けるため、近所ではなく、Camberwellの入隊受付まで行った。面接室に入った時、人々が笑ったが、私はなぜ笑われたかがわかっており、気も狂わんばかりになった。面接時、担当から、陸軍志願者の最低身長は知っているか等と聞かれたので、私は、戦時にはそれは重要ではない；背は高くはないが、体力等は他者よりもあり、射撃にすぐれている；入隊後にも成績不良ならば、辞めさせてくれればいいから、とにかくチャンスを与えてほしい等と言った。面接官は、断るかどうかは医師に任せようと言い、私を健康診断に回した。医師は、最初に「君はショーに出たことはあるか」と尋ね、私が、どうしてショーに出る必要があるのか等と答えた。医師は態度を改めたが、陸軍での最低身長を知っているか等と尋ねたので、私は計測器の所に行き、自分で測るのを許可してもらえば、自分が基準の身長を超えていると証明できるでしょう、と答えた。医師は私の申し出を褒めて、それが正しいと確信しているなら、入隊させようと言い、他の部分は自分が測定しようと言った。私は文句無しに合格し、医師は付け加えて、胸囲・肺・心臓等は平均以上に良く、視力が特に素晴らしい、王と国のために戦うことになるだろう等と言った。測定が終わると、私はその朝の初教練

に参加した。

服屋では、軍服の通常サイズは私には合わないと言われたが、私の配属が決まれば、すぐにぴったりした服を用意するとも言ってくれた。

Camberwellの教練場では、私たちは劇団のようなおかしな一団だったが、皆鋭くそして輝いており、最短期間で兵士になることを望んでいた。そこでは、短期間に驚くほど多くの教練があった。一定の教練期間の後は自由な時間もあった。その最初の日、私が門の方へ行くと、Doraが待っていた。彼女が、入隊できたかどうか尋ねたので、私は、もちろんだと答え、来週には自分は伍長になるだろうと話した。彼女の持って来てくれた新聞は、戦争で満ちており、イギリス・フランス・ベルギーが協力して、ドイツの侵略を防ごうと抵抗していた。私が、王と国のために戦う、と言うと、彼女は私を見て涙を流し、(涙を流すのは)ただうれしいからだと言った。私たちは腕を組んで、静かに家の方へと歩いた。

戦争にはほとんど関心の無かった主人公が周囲に影響され、意識が変わり、愛国心に火がつき、体型の不利をもものともせず、志願して入隊する過程を描いている。Samが面接に行ったのは何月何日なのかや、最後の方で、軍服は服屋(tailor's shop)で自分で注文するものなのか、いつDoraに入隊を知らせたのか等、不明な点はある。

一部ではあるが、大戦初期の一般人の考え方が伝わってくる物語である。

中国語訳について述べる。シリーズは12篇あるので、本稿で報告する3篇以外にも翻訳されているかも知れない。また、1912年に出版された作品も翻訳されている可能性はある。故に、他の翻訳を捜す際の一助になると思うので、主な登場人物の原作と中国語訳の対照表を挙げておく。

原作	中国語訳
Sam Briggs	薩姆 孛立克(4頁下第14行“煞姆”)
Dora	杜辣(6頁下第16行“杜拉”)
Louisa	魯依賽
Tom	湯姆
Mrs. Wilkinson	威爾欽夫人

書名は、原作が「Sam Briggs Becomes a Soldier (Sam Briggsが兵士になる)」としている。Marsh作品の読者にはおなじみの主人公なので、「あのSamが兵士に！」という驚きを持って迎えられたであろう。一方、中国では無名なので、物語内容から“吾血沸矣(俺の血は熱いぜ)”と改めるのも当然かと思う。

内容については、3篇を通じて言えるが、改訳・省略・加筆がよく見られる。本作では特に省略が多い。

連載開始となる冒頭部分を見ておく。

Until lately I didn't know that there was anything military about me no, not a morsel. And as for foreign politics, how many young fellows do bother themselves about them? When I heard that Austria was picking a quarrel with Servia I asked for the latest scores. When my mind, so to speak, was more filled with cricket than anything else, things began tumbling over each other in a style which took your breath away.(21頁左)

(最近まで私は自分に軍人的なところがあることを知らなかった そう、それも少しではなかった。また、海外の政情について、どれほどの若者が心配しているのだろうか？ オーストリアがセルビアに喧嘩を売っていると聞いた時、私は最新の成績を尋ねていた。私の気持ちが、他の何よりもクリケットのことでいっぱいだった時、情勢が驚くほどの調子で、次々にひっくり返り始めたのである。)

此次大戦。洵空前劫運。然發生至驟。雖事前一曰。亦無人能逆億知之。方謂列強互相猜忌。無敢先發。一時不至用兵。况各國執政。皆老成遠慮。誰則肯無事自擾。以故方吾聞奧塞交惡。逍遙作壁上觀。持樂觀態度。似雙方爲球戲而吾爲之評判。不知内幕風雲已變色也。(1頁上,句点は原文のまま,以下同)

(この度の大战は全くこれまでにない悲運で、始まりも甚だ突然であった。一日前でも誰もわからなかったであろう。列強は互いに疑い妬みあっているが、先に手を出そうとはせず、しばらくは兵を使う事態にはならなかった。その上、各国の政治家は老成し周到に考えをめぐらせているので、訳も無く自ら紛争を起こす者はいなかった。それ故、オーストリアとセルビアの仲が険悪だと聞いても、私はゆったりと高みの見物で、楽観的な態度をとっていた。それはまる

で、両国が球技をやっていると見て、私はその判定をしているかのようだった。内部の情勢が変わっていたことはわからなかったのである。)

原作は、主人公がクリケットに夢中であることに触れ、これまでのSamを知っている読者に向けた書き出しのようである。ただ、クリケットはイギリス人に身近なスポーツなので、Samを知らなくても、物語を読み進めるのに困難を感じさせない冒頭である。中国語訳の方はほとんど改訳し、読者への説明に重きを置いている。この改訳は、イギリス人ではない読者のためなのでやむを得ないだろう。

誤りを一例挙げる。Samが面接を受ける前の場面である。

It was pretty early when I got to Camberwell, but I wasn't the first there by a long way. The recruiting station was at some kind of a drill-hall made of corrugated iron, used by the Territorials. There were several chaps there when I arrived, sitting on forms, waiting their turns. Seated at a table were some officers. A young fellow was offering himself as I came in. He was a big chap, quite six feet high, with a great, broad chest. He made up for his size by being without brains. Very stupid he was at answering the questions which were put to him. The officer who was asking most of them seemed to wonder if he wasn't half-witted. I saw him make a note upon a sheet of paper and whisper something as he gave it to a sergeant. From the way in which the sergeant glanced at the candidate I dare bet sixpence that the note on the paper was a hint to the doctor to make sure that the chap was all right in the upper storey.(27頁左-28頁左)

(私がCamberwellに着いたのはとても早い時間だったが、一番手ではなかった。徴兵局は鉄板で作られた教練用の建物の所があり、国防義勇軍が使っている所だった。私が着いた時には、そこに数名おり、並んで座り順番を待っていた。机の方には将校が数名着席していた。私が中に入った時、若い男が一人申し込んでいた。その男は大柄で、180センチ以上もあり、大きく広い胸板をしていた。男の脳みそはその図体とは不釣り合いなものだった。尋ねられた質問へ、男はとてもトンチンカンに答えていた。ほとんどの質問を担当している将校は、男がバカではないのかどうかを考えているようだった。私は、その将校が用紙にメモして、軍曹にそれを渡す時、何かささやいたのを見た。軍曹がその志願

している男を見据えた様子からすると、6ペンス貨幣を賭けてもいいが、そのメモは、男の頭が正常なのかを確認するための医師への伝言であろう。)

康鄴威徵兵局乃一白鐵小屋。蓋臨時建造者。吾抵此地。因來自遠道。雖不後時。先我而在者已五六人。屏息坐兩旁。若有所待。中一板桌。一軍官據桌坐。桌上有簿籍。當是軍人名冊。更一少年軍人。體魄至偉。高可六尺。肩闊而胸挺。特神色絕愚鈍。偶作一二語。驗狀可掬。軍官若有所言。聲細不可聞。少年持一紙。以鉛筆畫之。而目視右旁坐待之一人。吾意此殆醫生驗體格之評語。而此一人者。必其及格者也。(9頁上-下)

(康鄴威徵兵局は白色の鉄の建物で、臨時に建てられたようだった。ここに着くのに遠い道のりをやって来たので、遅い時間ではなかったが、私の前にすでに5、6人いた。息を潜めて両側に座り、待っているようだった。中には机が一つあり、将校が一人そこに座っていた。机上には帳簿があり、軍人の名簿であろう。もう一人、若い軍人がおり、身体も大きく気力もみなぎり、180センチほどあり、肩幅は広く、胸もしっかり張っていた。ただ、その振る舞いは非常に愚鈍だった。向き合って一言二言話したが、愚かさが滲み出て、両手で掬えるほどだった。将校は何か言ったが、声が小さく聞こえなかった。若い軍人は紙を持って鉛筆で何か書き、右側に座って待っている一人を見た。これは恐らく医師が身体検査した時の評価で、この男はきっと合格したのだろう。)

原作は、Samの前の志願者が愚かであったことを述べているのだが、中国語訳は、面接する側の若い軍人を愚かだとしている。何とも奇怪なミスである。

もう一例、最後の場面を挙げておく。

We were at liberty after a certain hour, and when that first day I got to the gates, there was Dora waiting. There was quite a small crowd of girls, all waiting for their fellows. I can't tell you how proud I felt as I walked home with Dora a bit beyond myself, I was, and more.

“So they've accepted you?”asked Dora. I knew from the way she looked at me that she was reckoning me up. The way she did it so confused me that I daresay I put on more swank than I should have done had I been more master of myself.

“Accepted? Rather! Didn't you think I should be accepted? I'm going to be a corporal next week if not sooner.”

“Sam! No, are you really?”The serious way she took me was a bit of a facer. I laughed.

“Well, perhaps not quite next week. I don't think they give even first-rate soldiers their stripes quite as soon as that.”She had brought me an evening paper. There were no definite news in it, but it was full of blood and thunder. Men were fighting everywhere. English, French, and Belgians were standing shoulder to shoulder, bent on keeping the German peril back.“I tell you what, Dora,”I added.“If I'm not exactly a corporal next week, very soon ”I paused and I looked up at the darkening sky. Something seemed to catch me in the throat.“I'll be fighting for King and Country.”

She looked at me. I caught her putting up her handkerchief to her eyes, as my mother did; only her handkerchief was a great deal smaller than the mater's.

“Dora,”I asked,“what is the matter? Why are you doing that?”

“It's only Sam, it's only because I'm glad.”

There was something in her voice which made me wonder.

“Put your arm in mine,”I told her. She did. We walked homewards arm-in-arm more silent, somehow, than I had meant to be.(30頁右)

(我々は一定の時間の後は自由になれた、その初めての日、私が門の所へ行った時、Doraが待っていた。そこには、ほんの数人、女性があり、みんな誰かを待っていた。私はDoraと一緒に歩いて帰ることをどれほど誇らしく感じたか 私は普段より少し得意になっていた。

「やっぱり彼らはあなたを受け入れたのね？」Doraが尋ねた。私は彼女の見つめ方から、彼女が私に期待を込めているのがわかった。彼女にそう思われて、私は困惑してしまい、これまで通りに自制しようと思ったのだが、格好をつけて振る舞ってしまった。

「受け入れたかって？ そうとも！ 私が受け入れられるとは思ってなかったのかい？ 私は来週 そんなに早くないかも知れないが、伍長になるんだよ。」

「Sam! まあ、本当？」彼女が見せた真剣な反応は軽いパンチだった。私は

笑った。

「まあ来週ではないかも知れない。でも彼らが第一線の兵士たちに階級章を授与する場合ですら、こんなに早くはないよ。」彼女は私に夕刊を一部持ってきていた。紙面には確かなニュースは無く、暴力と流血でいっぱいだった。男たちはあちこちで戦っていた。イギリス人、フランス人、ベルギー人は協力して抵抗し、ドイツの侵攻を食い止めるよう努力していた。「君に言っておくが、Dora、」私は付け加えた。「もし来週、本当に伍長になってなくても、すぐに」私は止めて、暮れかけの空を見上げた。何かが私ののどをつかんだような気がした。「私は王と国のために戦うだろう。」

彼女は私を見た。ハンカチを目に当てていた、それは私の母のようだった、ただそのハンカチは母のものよりはかなり小さ目だった。

「Dora、」私は尋ねた「どうしたんだい？なぜそんなことをするんだい？」

「ただ Sam、ただうれしいからよ。」

その声には私を驚かせる何かがあった。

「君の手を私の方へ。」私は彼女に言った。彼女は従った。私たちは腕を組んで家へ歩いた より静かに、少し、私が思っていたよりは。）

毎日操畢。有數小時自由。余則出而覓吾杜辣。杜辣亦以時俟我。兩人恒握手偕歸。以寧父母。營門之外。婦女成羣。蓋皆如吾杜辣。來此有所俟也。吾每於人叢中呼杜辣。杜辣含笑逆我於睽睽衆目之下。吾不自知其舉趾之高。無何。出發有期。余欣喜告杜辣。告老母。毋以別離在即。黯然不歡。杜辣亦怏怏。吾百計慰阿母。愴然泣下。杜辣亦下淚。余曰：“阿母、杜辣勿哭。他日吾負盾歸來。歡喜當甚於吾以短人入選。”杜辣曰：“君勿憂。吾儕以君能爲君國殺敵。喜極而哭。非有他也。”余情知此語非眞。然公義私情。胡能兩全。言念及此。爲之慙然。(11頁上-下,コロン・引用符・読点は補った,以下同)

(毎日教練が終わると、数時間自由になれた。私は外へ出て杜辣を捜した。杜辣もちょうど私を待っていた。二人はいつも手を握って一緒に帰り、両親を安心させた。門の外には女性が集団であり、皆、杜辣のように待っているのだった。私が女性たちの中で杜辣を呼ぶと、杜辣は周りに注目される中、笑って私を迎えてくれた。私は気付かないうちに得意気になっていた。もうまもなく出発するからである。私は喜んでそれを杜辣に話し、母に話した。そして、別れ

が迫っているが、失意で悲しまないようにとも言った。杜辣もがっかりしていた。私は涙をこぼす母をいろいろと慰めた。杜辣も泣いていた。私は「お母さん、杜辣、泣かないで下さい。そのうち無事に帰って来ます。私のような背の低い人間が入隊していることをもっと喜んで下さい。」杜辣は「気にしないで。私たちはあなたが王と国のために敵と戦うことがとてもうれしくて泣いているんです、それ以外は何もありません。」私は、この言葉は真実ではないとわかっていた、しかし皆の前で言うことと心の中で思うことは両立しないものなのだ。そう考えると、慄然としてしまった。)

原作は、恋人同士ではあるものの、まもなく出征することに喜びを感じている男性とそれを誇りに思いながらも心配している女性との間の感情、特に女性側の複雑な感情を想像させる。一方、中国語訳は、Samの母親も登場させて、全く異なる場面に変えている。最後を慄然としたままで終わるのは、やはりおかしい感じがする。また、家に毎日帰っていたら、教練にならないではないかと思ってしまう。

3 《獻身君國》

原作は『Sam Briggs Becomes a Soldier . A Man in the Making』で、Strand誌 Vol. 49-No. 290(1915年2月)に掲載された。

中国語訳《獻身君國》は、《小説月報》第七卷第三号(1916年3月25日)に掲載された。訳者は“鐵樵”だけになっている。

原作のあらすじを述べる。

私(Sam Briggs)の目には常に「王と国のために」という文字が見えていた。私は英国王ライフル部隊の第9大隊に入った。我々の隊はほとんどがロンドンの人間で、最初にJudkins軍曹に出会った時、大部分が兵士としてはダメな奴だった。我々はBattersea Parkで約1か月教練を受けた。両親、Doraに姉(妹)のLouisaもよく見に来てくれた。

第一週の終わりは、私は身体のあらゆる部分が痛み、ほとんど死にかけていた。翌週には少しましになったが、慣れることはなかった。1か月の訓練で、私は「元気」の意味がわかった。宿泊は、Battersea Parkの近所の家で、5人一緒だった。宿泊は運次第で、貴族のようにもてなされることもあれば、浮浪者のように扱われ

SAM BRIGGS BECOMES A SOLDIER.



II.

A Man in the Making.

By RICHARD MARSH.

Illustrated by Charles Pears.

see them through my closed eyelids. I'm in the Ninth Battalion of the King's Royal Rifles; Kitchener's Second Army, we call ourselves; that's the lot I'm in. We're most of us London lads, from offices and workshops, or something like that, and we've never been anything else—or expected to be. And now here we are on the Sussex Downs, looking over the sea, in all sorts of weather, night and day, being turned into soldiers, men who can fight—for King and Country!

You should have seen some of us when we first joined—seen me, for instance. I'd never taken any real exercise in all my life. A stroll in the streets at night, that was about my mark.

We must have been a pretty hopeless lot when we first made the acquaintance of Sergeant Judkins. That was in Battersea Park. Some of us were better than others, but most of us were worse. His language was disgraceful—and I don't wonder. When I have seen new recruits come in, and seen them start their drill, it has given me a pain to watch them. It has, really! What the sergeant must suffer, spending his life in tackling new lots, goodness only knows! I shouldn't care to do it myself. But, speaking generally, a lop-sided, knock-kneed sort of chap six weeks after Sergeant Judkins gets hold of him is twice the man he was. And he knows it—he feels it—and he'll let you know it, too. "Swank" is what I call his bearing towards people who are just as he was.

We were drilled in Battersea Park for just on a month. Mother and Dad and Dora—

"**F**OR King and Country!"
Nearly every time I lay my head upon the pillow, or on the thing which has to serve me as a pillow, those words come dancing before my eyes, and when I go to sleep—if I do go to sleep—in the darkness I can

ることもあった。Battersea Parkでは概してよく面倒を見てもらえた。陸軍を持たなかったイギリスに、愛国心に燃える若者が新兵募集に押し寄せたので、宿泊設備が足りず、皆、我慢しなければならなかった。我々5人は、3人が台所の床、2人が食器洗い場の床で眠ったのだった。それでもこれはいい訓練だった。兵士はどこでも眠らねばならないのである。ただ、Battersea Parkでの宿泊は決して好きにはなれなかった。宿泊先には政府から日に6ペンス支払われた。また、政府は食料を支給し、我々が調理することになっていた。誰も料理を知らなかったので、宿泊する家の女性に調理してもらったが、うまくなかった。

我々に移動の命令が来た時、全員の装備はまだ揃っておらず、軍服を着ていない者もいた。私について言えば、ほぼ揃っていたと思う。下着2セット、靴下3足、ベルト、ズボン吊り、小袋6つ(150発分の弾薬を運ぶため)入りのナップサックを背負い、裁縫道具、歯ブラシ、髭剃り道具、ナイフ、フォーク、スプーン入りの大型の旅行鞆を持ち、つるはしと銃剣を横に携え、雑嚢と水筒を肩に掛けていた。ライフルとオーバーを併せれば、すべて揃った。

我々は水曜に出発した。2日前まで出発を知らされず、どこに行くかはわからなかった。出発直前に、Croydonまで行進することを知らされた。長距離だったが、しっかり行進したのは初めてだった。ロンドンは交通機関が発達していて、乗り物に乗る方がずっと安上がりだからである。我々はCroydonの街を過ぎ、約8キロ(私には80キロに思えた)行ったPurleyで止まった。そこで宿泊券が配られ、食事と宿泊の場所を自分たちで探しに行った。

指定されたLaburnum Villaへ疲れきった足で向かった。私を含めて3人が歩いて行くと、2人の女性が門の所に立っていた。どこに行くのか聞かれたので、宿泊券を示すと、幸運なことに、Laburnum Villaはここだと言われ、家に招かれた。家には、Miss Kershaw(49歳)、Miss Mary(48歳)、使用人のEmma Marchant(54歳)が住んでいた。そこには、我々3人分のベッドがあり、私には一部屋あてがわれた。また、疲れて膝が曲がらずにいた所、Kershawが進んでブーツの紐をほどき、脱ぐのを手伝ってくれた。そして風呂に入り、すばらしい夕食を皆で食べた。Batterseaではずっと不自由していたので、とてもうれしいことだった。食後はすぐに寝てしまった。翌朝6時、ラッパが響き渡る前に、Emmaに起こされ、たっぷりの朝食をとった。7時に整列し出発する予定だったが、別れの挨拶をし、外に出た時は、7時半だった。我々はKershawたちが作ってくれたサンドイッチ等をたくさん持っていた。

私は、都会には無い田舎の新鮮で活気のある空気を感じていた。近所の人々が半分ほど外に出て、我々を見送ってくれた。我々のほとんどが颯爽と歩いていたが、中にはそうでない者も数名いた。だが、彼らも王と国のために戦おうと志願してきたのである。そんな仲間の一人にBob Sparrowがいる。彼が志願した時、その身体は骨と皮だけで、身長等すべてが不適格だった。彼は医師に懇願し、1か月の教練で改善が見られなければ、その分の費用を弁償するという条件付で入隊を認められた。彼の信念と教練が奇跡を起こし、3か月後には彼は身体的な基準を満たしていたのである。

我々の教練を担当したのはJudkins軍曹だった。我々を前にした軍曹の最初の言葉は「お前たちのような連中をどこから集めてきたのか、わたしには想像もつかん。半分は障害者施設から、半分は精神病院から来たように見えるぞ。」等だった。特にSparrowに対して、足の欠陥を揶揄した。だが、軍曹はそんな新兵たちの教練でとても礼儀正しく、教練終了後には、Sparrowに謝罪していた。軍曹は自分の仕事を愛しており、「時にはゼロから男たちを作り上げるのがわたしの仕事だ」等と公言し実践していた。

午前にHayward's Heathに向けて行進(28.9キロ以上)を開始した。我々の中には平気な者もあり、そういう者はすぐに伍長や軍曹に昇進していくのである。我々はCrabbet Parkで食事をとった。そこでも地域の住民が集まり、大歓迎で差し入れをしてくれた。戦いに行けないならば、その他の方法で王と国のためにできることをする、それが人々の心にあるのだろう。若い女性が2人、果物の入ったかごを持って、私の所に現れた。一人が私に「要るだけ取ってちょうだい」等と声をかけた。更に、私のことを兵士としては背が低いと思ったのであろう、もう一人が「あなたは兵士になるほどの力はあるのですか？」等と言った。私は入隊以来、何か自分の血に入ったようで、そんな質問に対して「皆が兵士になるほどの力を持っています」等と始めて、最後には「国難の際には、誰もが国のために何かをする力を持つ

生まれつき足の無い障害者も頭を使って何かするのです」等と、自制を失いしゃべり続けてしまった。すると、女性の一人がもう一人に「彼にキスしたいんじゃない？」等と言い、もう一人が「そうすれば国のために何かすることになるし、私たちにもそれほどの力はあるわよね」等とかわいく応じた。二人は大笑いして顔を赤くし、私も顔を赤らめた。周りの仲間は笑い出し、私は大いに冷やかされた。この話は広まって、おかげで行進を再開した時、我々の士気は揚がっているようだった。

た。Hayward's Heathに着いた時、足が痛いとか動かないという声はあまり聞かれなかった。我々はMuster Greenという所に集められた。やはり付近の住民が我々を見に集まっていた。夜は6人で、ある紳士の家に泊まり、とてもよくもてなされた。

翌朝、今日で行進は終了し、夜までには正式な教練場に到着するという噂が広まった。行程がはっきりしたので、我々は疲れを忘れてしっかりと行進した。好天の下、Downsの丘を下り、Lewesという大きな街を通った。いつものように、多くの人々が我々を見に集まり、我々は征服者のような心持ちだった。南西からの海風を体感した。私の隣の男はロンドンの洋服の仕立て屋で、海に行ったことが無く、空気がおいしい等と言った。私は海辺へは数回行ったことがあり、いっぱい潮風を受けるのが大好きで、自分は船乗りを志すべきだったと思うほどである。

我々は海岸通りを進み、Downsの曲がりくねった坂を上った。上官の合図で我々は止まった。そこはたくさんのテントがある野営地で、すばらしい光景だった。指揮官は、少しの間、ここが我々の家になる等と言った。我々もすぐに慣れるとは思っていないが、野営こそが兵士の本来の家だと言うべきで、我々は祖国が必要とする兵士になるためにここにいるのである。我々は各テントに振り分けられた。私は12人で円錐形テントに入った。初めての夜は、自分がここにいるという気持ちやわずかな風でも大きな音を立てるテントのためにほとんど眠れず、風が止んだ夜明け頃に少し居眠りできた程度だった。起床ラッパが鳴った時、私は世界の終わりが来たのかと思ったぐらい緊張した。

男がある世界から全く別の世界に移る時、それを前もって知っておくことが必要である。しかし、野営をすることで、昔の生活が消え去り、兵士になるという意味がわかってくるとは思わなかった。これで今までの習慣から離れられるかはわからない。戦争からはるかに遠ざかっており、この戦争が最後になればと望んでいるが、今は、戦争の準備をすることが若者にできる最善のことになっている。戦いを好きな人はほとんどいないし、戦いを避けることがすばらしい方法だと思っているが、時には戦わねばならないのである。イギリスの現状がそれを伝えている。

兵士の教練は、身体だけではなく、精神についても重要である。ドイツはヨーロッパ制覇を企てている。ベルギーはすでに破壊され、フランスは破壊されつつあり、我ら3国でもドイツを止められないでいる。そこに、私は自分を呼ぶラッパの音を聞いた。私の参加がかえって邪魔になるかも知れないという不安はあったが、私が

なすべきことは自分を国のために役立つ男に変えることである。それはここにいる全員が思っていることである。ただ、人は生まれつきの兵士ではないので、自己の身体の使い方や集団での戦い方をしっかり教える必要がある。我々はこの教練によって、未熟な品と完成品との違いを知り、その違いが何を意味するのかまでも知ったのである。教練では落胆することもあったが、ほぼ毎晩、朝よりは進歩したと思いつつ眠っていた。そして、国のために戦おうとする時、自分は兵士として、男として、戦えるのだ、と身をもって知ったのである。

入隊する前に学んだことで私の励みになったことがある。もしドイツ軍が我が町に侵入し、住民を攻撃したならば、私は普段着のまま、撃ち返すであろう。だが、それは国の法に反することである。市民が自分の町を防衛することは、法では許されていない。ただの市民が防衛のために攻撃に没頭することは自殺行為である。これまでも各地でドイツ軍に市民が抵抗したため、ドイツ軍に町全体を破壊されてしまっている。戦争においては、兵士しか戦えないのである、そこが戦争とただの殺人との違いである。以前から言われているように、戦争は世界で最も壮大なゲームであり、正々堂々で行なわれねばならない。2国間の兵士のみがそれぞれの国と王のために気の済むまで戦い、その後は負傷者を助けるのに最善を尽くすのである。もし親のため、国のために何かをしたいならば、兵士になって自らの意思を知らしめるべきだ。しかし、そうなれば一般市民に向けて手を出してはいけない。

自分の中で兵士と一般市民との違いがはっきりし、私が兵士でなければ、たとえドイツが我が国に侵入しても、反撃できないことを理解したのである。だから、私は兵士になった。祖国のためにできることすべてを行なう権利を手に入れたのだ。そして、我々は充実した生活の中でこれまでにないくらい懸命にやっている。祖国の運命と安全は我々の手に委ねられている。我々はイギリスの栄光の相続者であり、その栄光を更に輝かせて後世に伝えなければならない。ドイツがイギリスを全滅させようとしているが、今こそ、我々の最善を尽くし、彼らに教え込まねばならない。我々はそのために、この海を見下ろす崖の上で訓練を受けているのだ。

Samが自らの考えを述べるのにかなりの紙幅を使っており、特に最後は、教練の内容を放ったらかして、戦意高揚のための演説になっている。

中国語訳について述べる。書名《獻身君國》の下に、“原名Your King and

Country want you ”、“ 本篇原稿殊不可多得祈閱者特別注意(本篇の原作は大変珍しく、読者は特に注意を払っていただきたい)”とある。

雑誌での原作名は「A Man in the Making(教練中の男)」であり、中国語訳にある“原名”ではない。ここから、単行本の章題が「Your King and Country want you」になっており、翻訳はそれに従った、とも考えられるが、物語からわかるように、「Your……」では内容にそぐわず、「A Man……」の方がずっとふさわしい。よって、中国語訳で“原名Your……”としているのは、訳者の誤りだと見たい。

次に、中国語訳の書名《獻身君國》であるが、これは原作中の「For King and Country」を訳したものである。この言葉は他の篇にもあてはまるが、スローガンとしては重要であり、また、原作名「A Man……」が直訳しても人目を引かないと考えたので、訳者が“獻身君國”を採用したのであろう。

主な登場人物の対照表を掲げておく。

原作	中国語訳
Sergeant Judkins	伍長 球欽
Kershaw	凱曉
Sparrow	司派洛

内容については、まず、後半に大量の省略があることが挙げられる。行進を終了し、12人でテントに入り、その内部を述べた後はすべて省かれている。具体的には、原作206頁左第10行以降、208頁の物語の最後までである。206頁右第3行以降は、上記のあらすじからもわかるが、最後まで延々とSamの思いが述べられるだけなので、意見表明は前半でもう十分だと訳者が思ったためかも知れない。

他にも自由に改訳・省略・加筆を行なっている。以下に3例挙げる。まず、Judkins軍曹のことを最初に述べる部分である。

You should have seen some of us when we first joined seen me, for instance. I'd never taken any real exercise in all my life. A stroll in the streets at night, that was about my mark.

We must have been a pretty hopeless lot when we first made the acquaintance of Sergeant Judkins. That was in Battersea Park. Some of us were better than others, but most of us were worse. His language was disgraceful and I don't wonder. When I have seen new recruits come in, and seen them start their drill, it

has given me a pain to watch them. It has, really! What the sergeant must suffer, spending his life in tackling new lots, goodness only knows! I shouldn't care to do it myself. But, speaking generally, a lop-sided, knock-kneed sort of chap six weeks after Sergeant Judkins gets hold of him is twice the man he was. And he knows it he feels it and he'll let you know it, too. "Swank" is what I call his bearing towards people who are just as he was. (197頁右)

(我々が入隊したての頃、みなさんに我々の何人かを見ておいてほしかった
例えば、この私をである。私はこれまでの人生で本物の訓練を受けたことは一度も無かった。夜に通りをぶらぶら歩くというのが、私の標準であった。

初めてJudkins軍曹に出会った時、我々は全く見込みの無い集団だったに違いない。それはBattersea Parkの中だった。我々の中の数人は他よりもすぐれていたが、ほとんどが劣っていた。軍曹の言葉遣いは不名誉なものだったそれは確かである。新兵が入ってきて、彼らが訓練を始めるのを見たことがあったが、じっと見続けるのは苦痛であった。本当にそうだった。軍曹は新しい連中を相手にすることに人生を費やしている、神かけて確かに、そのことで彼はどれほど苦しんでいるだろう。私なら自分ではやりたくない。しかし、大体において、身体が傾いて、よろよろしているような男でも、Judkins軍曹が鍛えれば、6週間後には見違えるほどになるのだ。そして、彼はそれを知りそれを感じ みなさんにもそれを知らせるのである。私はその態度を「うぬぼれ」と呼んでいる、それは正しく彼のような人を指すのである。)

然當吾等第一次赴操場時。雖云實地練習。不過少年喜事。初未計及真正之軍人固非易爲。以爲荷戈排隊而出。軍鼓前導。市人聚觀。即已盡軍人之能事。至於對仗發槍。能中而已。其他更何有者。吾儕之教習。爲伍長球欽。自值此人。乃大爲掃興。同輩中有經渠指點未能領悟者。呼暴(?)叱辱。不留餘地。此固職務所在。未便是惡。然每有繼之至新軍。經渠教練。其一種呼爾蹴爾之氣燄。與人難堪。令吾作惡。此人果爲熱心驅使而然乎。抑別有所弋(?)而故爲此態乎。吾則無從知之。但無論若何蠢漢。或文弱不勝磨礮者。經彼兩星期之訓練。即有脫胎換骨之觀。吾人常目以洪爐大冶。彼殆當之無愧者也。(1頁上-下)

(そして初めて教練場に着いた時、実地訓練とは言うが、若者のお祝い事に過ぎず、真の軍人になるのはそもそも容易ではないということに我々は全く思い

もよらなかったのである。武器を担い整列して出発し、軍楽隊に先導され市民に見送られることで、軍人としての能力を尽くし、戦闘で発砲する際は命中させるだけで、他に何があるのだと思っていた。我々の教練担当は球欽伍長だった。彼に出会って、先の甘い思いは一扫されてしまった。仲間の中には彼の指導を受けても体得できない者がいて、これ以上ないほど叱られ罵られていた。これは元来、仕事上のことで、嫌悪するのは具合が悪い。しかし、新兵が来て彼の教練を受けるたびに、それが続いた。その人を見下したような威勢は誰にも耐えがたく、私も不快に思った。彼は熱心さに駆り立てられてそうしているのか、それとも他に捕らわれる(?)所があって故意にそういう態度をとっているのか、私には知りようが無かった。ただ、どんなに愚かな男でも、ひ弱でしごきに耐えられない者でも、彼の2週間の訓練を受ければ、全く生まれ変わったようになる。私は、巨大な炉で大量の金属が精錬されるように新兵を鍛え上げるのをよくこの目で見たのである。それはほぼその名に恥じないことであった。))

自由に改訳・加筆・省略している。さすがに2週間の教練では鍛え上げるのは無理だと思う。次は、Miss Kershawたちに出会う場面である。

I had a slice of luck I never shall forget it. I was so dead tired that I could hardly drag one foot after the other. Laburnum Villa, Sydney Road, was where I was to be quartered. It seemed to me that I never should get there; when I did I thanked my stars. Three of us were billeted there. It is a new road; half the houses weren't finished, and there wasn't any proper pavement to walk on. The sight of Laburnum Villa did all three of us good. It was a double-fronted, detached house, standing in quite a nice piece of garden. Two ladies were standing at the front gate as we came along.

“What address are you looking for?”asked one of the ladies. I had the ticket in my hand; I told her.“This is Laburnum Villa. Come in! Why, you're only boys, and how tired you look!”(200頁左)

(私は幸運だった 決してこのことは忘れないだろう。私は死ぬほど疲れており、足を一歩ずつ引きずることもままならないほどだった。Laburnum Villa、

Sydney Roadが私の泊まる所だった。そこにたどり着くのは無理だと思っていたので、着いた時、幸運だと思った。我々は3人でそこに泊まることになっていた。新しい道があり、家屋の半分は完成していなかった、専用の歩道は全く無かった。Laburnum Villaの光景に我々3人は気をよくした。玄関が2つある一戸建てがあり、すてきな公園の一画に建っていた。我々が進んでいると、門の所に婦人が2人いた。

「あなたたちはどの住所を探してるの？」一人が尋ねた。私は宿泊券を持っていたので、彼女に話した。「ここがLaburnum Villaよ。お入りなさい！まあ、男の子だけで、それにとっても疲れているようだよ！」)

天下事無平不陂。否極則泰。軍隊第一日出發。吾幾經強忍苦競。而後延至黃昏。此黃昏。即爲吾一日中之蔗境。則爲始願所不及也。當吾躑躅於刺波嫩鎮之錫特路。左足既前。右足不能繼進。疲憊之程度。殆已隣死。同伴皆先行。遂相失。昂頭四顧。初無意尋覓吾友。道旁廡下。有無六尺隙地。則爲吾所欲知者耳。是地爲新闢馬路。建築之工程未竟。路旁行人之邊路。亦未竣工。石塊礫犖。安所可容吾偃臥者。數十武外。有一精舍。短垣之內。林木蒼翠。濃綠與紅牆相映。蓋宅舍前面之小花圃也。門前有兩婦人。驪肩並立。若領略斜陽風景者。吾躑躅過之。一婦卒然問曰：“汝奚往者。覓友迷途乎。”余舉手中宿券示之。曰：“然則胡獨行踽踽。”吾告以憊不能行。同伴相失。婦曰：“噓。可憐之童子。此間名刺波嫩鎮。吾家有榻可下。其隨吾來。”(3頁下-4頁上)

(世の中は平穩ばかりでもなく、また波乱ばかりでもなく、不運の後には幸運が来るものだ。部隊の出発初日、私は苦しい行進のくり返しに耐え、日暮れになった。この日暮れ時が私の一日の佳境だった。当初の希望通りには行かなかったのである。私は刺波嫩鎮の錫特路をさまよい、左足が前に出ても右足がそれに続かない状態で、疲労の程度は死ぬ寸前だった。仲間皆、先に進み、はぐれてしまった。顔を上げて周りを見ても、仲間を捜す気は全く無く、道端や家の周囲に190センチ分の隙間があるかどうか私の知りたいことだった。ここは新しく開発された通りで、まだ完成しておらず、端の歩道も未完成だった。石やがれきの所で横になれるはずがない。数十武(十武は約9メートル-筆者)の所に、立派な家があり、低い垣根の内側は木々が青々としていた。深い緑と赤い壁が対照をなし、家の前の小さな花壇を覆っていた。門の前に婦人が2人、

肩を並べて立ち、斜陽の眺めを觀賞しているようだった。私がそこを通り過ぎた時、一人が急に尋ねた「あなたはどこに行くの？ 友達を捜して道に迷ったの？」私は持っていた宿泊券を示して「そうでなければ一人寂しく歩かないですよ。」と言い、疲れて進めなくなり、仲間とはぐれたことを伝えた。婦人は「まあ、かわいそうな子、ここが刺波嫩鎮よ。私の家に空いてる寝台があるから、ついていらっしやい。」)

原作は、3人で行動しているのに、中国語訳は、皆とはぐれて、1人になってしまっている。不必要な改訳に思える。中国語訳で“則爲始願所不及也(当初の希望通りには行かなかった)”とあるのは、行進の出発前に“行經許久。皆循電車軌道。吾則願出數銅幣。附電車以行。(長時間行進するのだが、すべて路面電車の軌道に沿っているので、私ならお金を少し出して、電車で行きたい。)”(3頁上)と述べたのを受けたものだろう。

最後に、Kershawたちの家に泊まった翌朝、出発する場面を見ておく。

In the morning Emma had to come into the room and give me a good shaking before I could be got to understand that a bugle was being blown in the street outside. She told me it was six o'clock. We had to fall in at seven and start directly afterwards. We had a great dish of really good ham and eggs for breakfast; then we said good-bye, and soon after half-past seven we were on the road with a lot of sandwiches and things which the Misses Kershaw had given us.(200頁右)

(朝、Emmaが部屋に来て、ラッパが通りで鳴らされていることに気付く前に、やさしく揺り動かし(起こし)てくれた。彼女は6時だと教えてくれた。我々は7時に整列し、そのまますぐに出発せねばならなかった。我々は朝食に本当においしいハムと卵をたくさん食べた、そして別れの挨拶をし、7時半過ぎには通りに出ていた サンドイッチその他をたくさん持っていたが、それはKershawたちが持たせてくれたものだった。)

翌晨六時。依媽入。搖吾醒。時喇叭聲鳴鳴。知軍中已齊人矣。惕然自警。雖睡意方濃。不敢留戀。匆匆披褂出門。而盥器已陳。早餐已備。小桌之上。大盤盛火腿。鷄卵。又牛乳一器。夾肉麵包多許。予與凱曉姑娘。前此無素。嗣後亦

未曾相値。而當時細意熨貼。惠我無私。令人感激不置。細數生平良友。不得不爲凱曉屈一指矣。飽餐而後。握手道珍重。七時半。吾已歸伍。排隊之際。忽覺乾餼袋龐然。累然。探之。不知何時。凱曉姑娘以夾肉麪包滿實其中。吾感極。誓多殺德人以報。讀者勿疑我嚙語。彼凱曉姑娘意思。殆自恨身爲婦人。不能執殳前驅。因間接效綿薄於吾等軍人。苟不努力殺敵。將何以消受此麪包哉。(4頁下-5頁上)

(翌朝6時、依媽がやって来て、私を揺さぶり起こしてくれた。その時、ラッパの音が鳴っていたので、部隊にすでに人が揃っているのを知った。自ら気をつけており、眠気がひどかったけれども、未練がましくぐずぐずしている訳にもいかなかった。慌しく装備を整え、家を出ようとした所、洗面器が並び、朝食が用意されていた。小さなテーブルの上にハム、卵を盛った大皿、牛乳の容器、たくさんのサンドイッチがあった。私は凱曉とは以前に交流も無く、今後に会うことも無いだろう。だが、この時、細やかで適切に、私心無く私に恩恵を与えてくれたことには、ただただ感激するばかりである。生涯の親友を詳しく数える時、凱曉をその一人に数えるのは確かである。満腹になり、握手して別れの挨拶をした。7時半、私は隊に戻った。整列する時、ふと携帯食料袋がいっぱいになって重なっているのに気付いた。見ると、いつの間にか、凱曉がサンドイッチで袋をいっぱいにしてくれていたのだ。私は深く感動し、ドイツ人を多く殺して、この恩に報おうと誓った。読者のみなさん、私がたわごとを言っていると思わないで下さい。この凱曉の気持ちは、自分が女で、武器を取って前線を駆けることができないのを残念がっているのだろう。だから、間接的に我々兵士に微力を尽くしてくれた。もし全力で敵を倒さなければ、このパンをいただく資格など無いのである。)

中国語訳は大幅に加筆し、凱曉(Kershaw)を称揚している。実は、訳者が凱曉を評価するのは本文中だけではなかった。中国語訳第1頁の右頁に、空白の頁の埋め草として“備餘漫墨”という欄がある。“獻身君國篇書後”と題して、訳者の本作への感想とそこからの主張が述べられている：中国を改善するには、教育の普及と国民皆兵制に拠る“軍國主義”しかない；国民皆兵制が実施されれば、自分も兵士になり、ヨーロッパの兵士と戦場で遭っても決して引けを取らない；兵士の質と女性の教育水準が上がれば、中国にも凱曉のような女性が大勢出てくるだろう；そ

の障害となるのは従来の家父長制で、家父長制と“軍國民”とは両立しないので、解決のために有能な指導者が現れることを望む；自分は小説を訳すことで、人々に新しい刺激を与えられたらと自負している、等と述べている。訳者の主張は興味深いのであるが、やはり余白の穴埋めなので、大反響を呼ぶことは無かったようである。

4 《戦事真相》

原作は『Sam Briggs Becomes a Soldier . Baptism of Fire』で、Strand誌Vol.49-No.292(1915年4月)に掲載された。

中国語訳《戦事真相》は、《小説月報》第七卷第三号(1916年3月25日)、《獻身君國》の直後に掲載された。訳者は同じく“鐵樵”だけである。

原作のあらすじを述べる。

私(Sam Briggs)を含めた兵士たちは、何の知らせも無く、列車に乗せられ、港へ行き、嵐の中、船に乗り、海峡を越え、フランスのHavreに上陸した。我々はSainte Adresseを過ぎ、丘を上った。そこで我々は4日間塹壕を掘った。

その後、我々は丘を下り、列車に2日間乗り、下りた所は、何も無い原野だった。遠くから大砲の音が聞こえ、私は緊張した。我々はその音の違いで、大砲の違いがわかるようにならなければならなかった。我々は、雨の中を長い間進み、村のような所に着き、そこで泊まった。私は他の百人ほどと共に巨大な納屋に入った。運よく我々には作業班の作った温かい食事が配られた。私の人生で食事がこれほどありがたいと思ったのは初めてだった。ここから約16キロの所で、数週間に渡り戦闘が行なわれているのを知った。

我々が寝ようとした時、誰かがやって来て、低い声で、起きて整列するよう命令された。Billington軍曹で、彼の話では、夜襲をするらしかった。

大隊全員が整列し、司令官から、我々が兵士であることを示す機会が来た等と短い話があって、我々は進んだ。私は非常にドキドキしていた。雨は止んでおり、長い間ぬかるみを歩いた。止まるよう命令され、小隊ごとに分けられた。我々の隊長は、Baring少尉で、元気いっぱいの若者だった。少尉からは、低い木の陰に身を隠すよう注意があり、ドイツ軍が周りに潜んでいるかも知れないので、しっかり見張るように言われた。暗闇の中、我々の士気を保つために、なぜここにいるのかの情



報が求められていたので、少尉の話で、我々は3時間以上待っていたが、ずっと警戒して見張っていた。

これは我々の初めての实战であり、我々からの砲火の洗礼であった。すぐそばに千人以上の敵がいる、それを考えると妙な感じだった。沈黙の中、冷たい朝の風が遠くから行進の足音を運んできた。そこに、上官のDurrantが現れ、少尉に作戦を伝えた。それは我々にも聞こえた：ドイツ軍は我々の2倍3倍の数らしく、一本道を通るだろうから、我々はその周りに身を隠す；ドイツ軍が我々の望む所に来たら、警笛を1回鳴らすので、各自狙いをつける；再び警笛が鳴れば、撃つ；再び警笛が鳴れば、撃ち方止め；その後すぐに警笛が鳴れば、突撃；敵が来るまでには明るくなるので、しっかり狙って撃つ；警笛が鳴るまでは動いたり音を立てたりしない、との命令だった。

我々は銃を手にした。私はまもなく生きている人を撃つ、彼らを殺すために最善

を尽くす、そう思うと、銃を持つ手が冷たくなった。全員がそう感じていても、おかしくはないだろう。ドイツ軍のしっかりした足音が次第に近づいてきた。彼らも我々の仲間を畏にかけ、殲滅させようと企てているのだと思うと、私の手は落ち着いてきた。

ドイツ軍は、まず偵察らしき兵士が12人現れた。そして6列の本体がやって来た。皆、立派な体格で灰色のコートを着ていた。数千人はいただろう。私は標的を定めつつ、警笛を待っていた。行進は続いたが、警笛は無かった。敵は我々の6倍以上はいる、もし気付かれれば、逃げるか降伏するかしかないだろう。Sparrowが、警笛はどうした等とつぶやいた瞬間、警笛が鳴った。それはドイツ軍にも聞こえ、彼らの行進が止まった。彼らの中で命令の聲がかかり、各自の銃が動いた時、2度目の警笛が鳴った。

千丁のライフルがくり返し火を噴いた。敵は混乱し、そのうち逃げようとパニックに陥った者だけが残された。警笛が鳴り、我々は撃つのを止め、銃剣を先に突撃した。敵は銃を放り出し、何かを叫び、右往左往した。警笛が鳴り、我々の攻撃は終わった。残った敵は降伏した。突撃した数分間、私は我を失い、大柄のドイツ兵の胸に銃剣を突きつけていた。実はその男も恐怖で逆上しており、何とか自分を抑えようとしていなければ、私の方がやられたかも知れなかった。ただ、あと数秒で、私は男を突き殺していただろう。私は近くの敵を全員突き殺すつもりで、それが楽しくなるだろうと思っていた。しかし、警笛が間に合ったため、私は剣を下ろした。我々全員がそうした。我々は息を切らし、血走った目で敵を見た。気持ちは殺意で高ぶり、武器を持つ手はそのために震えていた。

戦果は悪くないものだった。六千近くのドイツ兵が我々の計略にかかり、半分以上が逃走、千人近くが捕虜になった。我々は捕虜を扱ったことがなく、ドイツ語を話せることになっている隊長らは誰も話せず、命令を伝えに来た参謀将校1人がドイツ語を話すだけだったので、我々と捕虜の間に混乱が起こった。ドイツ側の士官が何かどなりながら、我々の小隊長に向けて銃を撃った。私は、この男の表情がおかしかったので、目をつけていた。だから、男が2発目を撃つ前に、私は男の後頭部へ弾を撃ち込んだ。捕虜の方が多く、あちこちで騒ぎになっていたのも、この件で、彼らの多くがそばに放棄していたライフルを拾おうとした。しかし、我々はその機会を与えなかった。ドイツ側の士官らが大声で命令したので、混乱は終わった。

我々は不眠不休で、捕虜を連れて出発地点に戻った。戦いの最前線がどうしても

のかを学んだので、我々にはすばらしい初体験だった。出発地点にいた兵士らが捕虜を見張ったので、我々は食事をとり、眠った。起きた時、輸送車両が来ていた。それは板で窓を覆うなどバスを改造したもので、1台には「Walham Green」の文字が残っていた。Walham Greenの我が家から職場まで何度もこのバスに乗っていたのだらうと思うと、私は胸にぐっと来た。我々は車両に乗せられ、ひどい状態の道をひどく揺さぶられながら進んだ。真夜中ぐらいに下り、周りは暗闇で何も見えなかったが、話し声が聞こえ、人が大勢いるようだった。我々は小屋に入れられ、寝台も何も無い所で、着の身着のまま眠った。そんな状態だったが、すばらしい睡眠時間だった。なぜなら、これ以後、睡眠は更にひどい状況下になったからである。

翌朝、我々が整列すると、もとの司令官ではなく、Clifton少佐が、塹壕に行くよう指示した。恐らくもとの司令官は、降伏したドイツ兵に撃たれ 幸い私が2発目を阻止したのだが 負傷者リストに入れられたのだらう。我々は4.8キロ行進し、水路の端のような所に着いた。はるか遠くから大砲の音が聞こえるものの、周りに戦争を示すものは無かった。我々が止まった時、地面の中から汚れた男が顔を出し、挨拶をした。男は壕内の者を外に出し、我々を壕に案内した。出入口は狭く、中には水が30センチたまり、周囲の壁は悪臭を放っていた。我々は這い回るように進み、右に曲がると幅が広くなり、更に左に行くと、約120センチの幅になった。そこで男は我々を止め、ドイツ軍は前方63メートル辺りにおり、顔を出せば必ず狙撃されること、無線機がここにあり、命令は無線を通じて受けること等を話した。

我々は教練で塹壕を体験していた。しかし、実際は面食らうものだった。まず我々を襲ったのは、孤独と沈黙だった。遠くから砲声は聞こえていたが、銃声は無かった。Sparrowが許可を得て、土の隙間から外を覗いてみた。平野には死体が点在していた。彼は、足下にあった、ヘルメットをくくりつけた棒を拾い上げ、少尉に許可をもらい、ヘルメットを上にした。すぐに「パン！パン！」と音がし、ヘルメットは下に落ちた。驚いたSparrowの顔は可笑しかった。彼は、正確な方向はわからないが、敵は近くにいる等と言った。直後に、彼が「あれを見る！」等と叫んだ。見ると、上空に大きな丸い物体が飛び、我々の方に向かっていった。少尉は双眼鏡で確認し、あれは「Jack Johnson」と呼ばれているものだらうから、よく見ておくよう言った。私は、3メートルほどの所に落ちたら、我々は終わりだらうと思った。その物体は轟音と共に近づいてきた。そして巨大なうなり声を上げて着弾した。我々への砲火の洗礼だった。様々な音が入り混じった大音響が起こり、閃光が

輝いた。何かが我々の所にも降ってきたので、私はみんな殺されると思った。それが何かはわからなかったが、誰も負傷しなかった。すべてが空騒ぎで何も無かったので、我々は大笑いしてしまった。私は、このためにドイツ軍はどれだけ時間と労力を費やしたのだろうかと思った。

その後すぐに、無線連絡があり、郵便配達係が手紙を持って来るとのことであった。我々は再び大爆笑した。Jack Johnsonの上演の直後に手紙とは、とても可笑しく思えたのである。配達係は本当に手紙を持って来た。手紙はほぼ全員に来ていた。私には母とDoraから来ており、他にStanway大佐からの短い挨拶状もあった。それによると、大佐は治療中であるが、私がいなければ(ドイツ兵の2発目を止めていなければ)、事態は悪くなっていたこと、私の行動で自分が助かったことを知っており、機会を設けて、私に謝意を伝えたいとのことであった。私は興奮して、その手紙を封筒に戻す時には手が震えていた。

一兵士の視点から、命令・準備・実戦・後始末と、感想を交えながら、克明に描写され、戦争の恐ろしさが伝わってくる物語である。

中国語訳について述べる。

書名について、原作「Baptism of Fire(砲火の洗礼)」に宗教に関わる用語が使用されているので、それを避けたのであろう、わかりやすく“戦事真相(戦争の真の姿)”としている。

主な固有名詞の対照表を掲げておく。

原作	中国語訳
Sam Briggs	薩姆 孛列克
Baring	排林(2頁下第3行“牌林”)
Walham Green	威哈姆 辯利

内容については、省略がやや多く、加筆も短いものがよく見られる。物語を変えることなく、自由に訳している。2例挙げる。まずは、待ち伏せ攻撃を指示する場面である。

“.....We're lying all round; if they keep on they'll walk right into the trap. So far as we know, they've not a suspicion that there's anyone in the neighbourhood.

Don't you do anything to give yourselves away. When they've got where we want them to be a whistle will be blown once. When it is, you are to take aim at those nearest to you. Directly afterwards it will be blown again. Then you are to fire; keep steady, and take care that your shots are all hits. They are probably two or three times as many as us, so we can't afford to waste a single shot. You're to keep on firing till the whistle sounds again you know the 'Cease Fire'? Almost immediately afterwards it will be blown again a double call you know the 'Charge.' Then you're to charge for all you're worth. They'll be all in confusion; you'll have them at a disadvantage; if you manage the business properly you'll do them all in. Now, do you all understand?" There were murmurs from the men that they did. Then he wound up: "Then that's satisfactory. It's getting lighter every moment; you'll be able to get a good shot at them by the time they come. In the meanwhile don't you move or make a sound till the first whistle goes." (423頁右)

(「……我々は周りを囲むように待ち伏せしている；もし奴らがそのまま進めば、この畏の中にまっすぐ歩いて来るだろう。我々の知る限り、奴らは付近に人がいることを疑っておらん。貴様たちはそれをわからせるようなことをするんじゃないぞ。我々が望む場所に奴らが来た時、1度目の警笛が鳴らされる

1度だ。その時、貴様たちは自分に最も近い奴に狙いを定めるのだ。すぐ後に、2度目の警笛が鳴らされる。そしたら貴様たちは撃つのだ；落ち着いて、すべて命中するように気をつける。奴らは恐らく我々の2倍3倍いる、故に我々には一発もミスする余裕は無い。警笛が再び鳴らされるまで撃ち続けるのだ。その警笛は「撃ち方止め」だ、わかるな？ ほぼその直後にまた警笛が鳴らされる。2回だ。それは「突撃」だぞ。そしたら貴様たちは全力で突撃するのだ。奴らは皆、混乱している；貴様たちはその不利に乗じて攻めるのだ；もし貴様たちがうまくこの作戦をやり遂げたら、奴らを全員負かすことになる。さあ、皆、わかったな？」理解したというつぶやき声が男たちから起こった。それから彼は締めくくった「では大丈夫だ。次第に明るくなっている；奴らが来る頃にはすばらしい射撃ができるだろう。しばらく、1度目の警笛が鳴るまでは、じっとして音を立てるなよ。」)

“……以我所知。德軍蓋未嘗計及此處可設伏兵。彼等必徑遂前行。而墮吾術

中。然慎之。敵衆方兩倍於我。苟爲所知。即不啻自殺。汝等見其來。慎毋動。吾鳴笛爲號。聞第一聲。擊鎗取準。笛再鳴。鎗發。嗣後繼續射擊。勿復停頓。第善用而械。毋使一彈虛發。至吾三次鳴笛。即止勿射。俟後命。已盡聞乎。”衆屏息微應曰：“諾。”(3頁上)

(「……私の知る限り、ドイツ軍は、ここに伏兵が仕掛けられることには思い至っておらん。奴らは必ずこの道をやって来て、我々の罠に落ちるだろう。だが、注意せよ。敵は我々の2倍はいる。もし知られたら、それは自殺と同じになってしまう。貴様たち、奴らが見えたら、決して動くな。私が笛を鳴らすのが合図だ。1度目は銃を構えて、狙いをつける。もう一度鳴れば、撃て。そして休まず撃ち続けろ。ただよく狙って撃て、一発も無駄にするな。私が3度目を鳴らすと、撃つのを止める。そして命令を待て。すべて聞こえたか。」皆は小声で「わかりました。」)

中国語訳は、突撃の指示が略されている。待ち伏せ攻撃の締めくくりなのに、不可解な省略である。最後にもう1例、その突撃の場面を挙げる。

They did not wait for us to come. They became a disorderly mob, throwing down their guns, looking for safety in this direction and that. Words were shouted in what I supposed was German which were meaningless to me, but were plain enough to those who commanded us. Again the whistle sounded, the order to cease the attack; the enemy had surrendered.

The information that we were not to fight any more, because there was no one to fight, I do believe unnerved me more than anything. In a few minutes more I should have been stark mad. As I got the point of my bayonet up against a giant German chest, quite oblivious to the fact that I was just as likely to be the victim as he was, as beside himself with fear he tried vainly and frenziedly to draw himself away, and I knew that in another second I should have spitted him to the heart a little chap like I am, and him six foot two or three I knew what was meant by seeing red. I would have stuck my bayonet into as many of those Germans as I could reach, and have revelled in the fun. I don't mind owning that if that whistle hadn't sounded when it did I believe that I should have refused to

notice it, but have bayoneted all the Germans I could reach. I should have had no trouble; I doubt if they would have offered resistance. I should have learnt to the full what killing meant.

But the whistle did sound in time, and it pulled me up. It pulled us all up. There we were, a great crowd of panting men, staring at the grey-coated strangers with murder in our eyes, our hearts raging with the desire to kill, the weapons with which to do it quivering in our longing hands.(426頁左)

(連中は我々が来るのを待たなかった。連中は混乱した暴徒と化し、銃を投げ捨て、あちらこちらと安全な方向を探していた。何かドイツ語らしき言葉が叫ばれていた、それは私には無意味だった、しかし、我々に命令する響きは十分に明瞭だった。再び警笛が響いた、攻撃を止めろとの命令だった；敵は降伏していた。

これ以上戦うなという知らせは、戦う相手がなくなったからだが、何よりも私の戦意を失わせたように思う。この2, 3分ちょっとの間、私は全く狂っていた。私は銃剣の先を巨漢のドイツ兵の胸に突きつけた、その時、自分もその男も同様に犠牲者になる所だったが、その事実に関心していなかった；男の方は、恐怖で逆上し、自分の武器を引っ込めようと無駄にまた怒りながら奮闘していたのである、私はもう少しで男の心臓を突き刺していたであろう

私のような小柄な男が、190センチある男を、である 激怒することが何を意味するのか私にはわかった。私は、手の届く所にいる、なるべく多くのドイツ兵に銃剣を突き刺し、そこに非常な喜びを感じていただろう。警笛が鳴った時、鳴らなければいいのと思ったことを素直に白状するし、手の届く所にいるドイツ兵を全員突き殺すまでは、警笛に気付かずにようと考えてもいた。連中が抵抗するかどうか疑問だったので、困難は無いと思っていた。私は、人を殺すということが何を意味するのか、十分に学んだ。

しかし、警笛が間に合って、私を止めてくれた。我々全員を止めてくれた。そこで我々、大勢の熱くなった男たちは、灰色のコートを着た来客を殺意のこもった目でじっと見ていた、我々の心臓は殺したいという思いで激昂しており、そのためにある武器は抑えきれない気持ちでいる我々の両手の中でガタガタ震えていた。)

德國殘軍。不俟余等之至。即擲鎗於地。以示不復抵抗。而皆大聲發言。其所言。吾心知是德語。然此無與吾事。我固一字不能懂得。就中有一高六尺二三寸之德人。尚持械未棄。余奔赴之。以鎗尖衝其喉。吾非不知彼等所言。必爲願降不戰。然吾此時已癡發。雅欲手刃一甚長之敵。以鳴吾雄。吾又逆知號笛行且更鳴。更鳴即爲止戰之命令。吾苟弗急擊者。即失此大好機會。而此德人者。其體魄之長度。雅足令我滿意。故吾不惜出死力攫取之。渠見我勢洶洶。爲辟易。勉強舉鎗拒敵。而號笛果復鳴。稍遲三五秒鐘。吾刺刀必已飲血。惜哉。事後追思。苟有多許時間。供吾等戰鬥者。吾將殺敵人多許。至盡我之量。雖彼等或抵抗。吾豈畏彼。吾固非欲殺彼手無鎗械之人。然號笛。軍令也。吾雖狂熱。奈何違軍令。而此次戰事。遂於以結束。於時曉日初出。東方天末。紅如玫瑰。長天無纖雲。曉風迎人。若相慶和。自吾入軍隊以來。獨此日爲有情天氣。然當太陽之榮光。普照大地。慘狀亦同時發現。德軍之已死者。垂死者。雖不至死負重創不能動者。彌望皆是。其中未殊者。更昂頭向吾等熟視。呻吟呼痛。人類之作此狀。前此所未見。乃今知戰事真相如此也。(6頁上-下)

(ドイツ兵の生き残りは我々が来るのを待たなかった。武器を投げ捨てて、もう抵抗しないという意味を示した。そして全員大声で叫んでいた。その言葉はドイツ語だと思ったが、私には関係無かった。そもそも私は一言も理解できないからである。中に190センチのドイツ兵が1人おり、武器を所持したままだった。私は駆け寄って、銃剣の先を男ののどに突きつけた。私は、連中の言わんとする所がわからない訳ではなく、きっと投降を申し出ているのだらうと思っていた。しかし、私はこの時、狂っており、この背の高い敵を突き殺し、自らの勇ましさを示したいと強く思っていた。また、私は、警笛がまもなく鳴らされるだらうとも考えており、鳴れば、それは戦闘中止の命令である。もし今すぐに突き刺さなければ、絶好の機会を逃すことになるのだ。このドイツ兵は体格・気概ともに、私を十分に満足させる相手だった。故に、私は全力を尽くして男の銃を奪い取ろうとした。男は私の激しい勢いを見て、たじろぎながら、無理に銃を持って抵抗しているようだった。そして、警笛が再び鳴った。あと3, 4秒遅れていれば、私は銃剣を突き刺して、返り血を飲んでいただらう、残念だ。思い返してみると、もし我々に戦う時間がもう少しあれば、私は可能な限り、敵を大勢殺していただらう。連中は抵抗したかも知れないが、私は怖くなかった。もちろん私は、武器を持っていない人を殺したくはない、しかし、

警笛は命令である。熱狂していても、軍の命令には背けない。そして今度の戦闘は終わりになった。その時、太陽が顔を出し、東の地平線はバラのように真っ赤だった。空には小さな雲一つ無く、夜明けの風が我々の方へ、祝福するかのように吹いていた。私が入隊してから、この日だけが私の気分合うすばらしい天気だった。しかし、太陽の光は大地のすべてを照らし、惨状も同様に明らかになった。ドイツ軍の死者、重体の者、重傷で動けない者は、見渡す限りにあふれていた。その中で、死んでいない者は、顔を上げて、我々をじっと見つめて痛みを訴えていた。人間が自作したこの有様は、前に見たことは無く、戦争の真の姿はこうなんだということが正に今、わかったのである。)

原作は、攻撃に夢中になるあまり、自分を失いかけた主人公を描き、戦場という究極の緊張状態の中では、それが誰にでも起こりうるのだと言っている様に思える。中国語訳は、その部分はきちんと訳し、更に戦闘後の情景描写まで加筆し、より現実感を出そうとしているように思える。ただ、その加筆が必要なのかは疑問である。

5

第一次世界大戦当時に大戦を扱った、現在ではほとんど知られていない、イギリスの小説が、全12篇のうち3篇ではあるが、中国語に訳されていたことを明らかにした。翻訳が掲載された《小説月報》の編集責任者、惲樹珏自らが訳していたということで、その意気込みが伝わってくるようでもあった。

しかし、この第七巻第三号以降、同誌には、大戦を扱う小説はあまり掲載されなくなっている。もし原稿が集まらなかったならば、このSam Briggs出征譚の続きを訳せたはずであるし、翻訳は惲樹珏自身でなくても人に依頼できたであろう。小さな謎である。或いはその理由が同誌の余白頁に書かれているかも知れないので、更に気をつけて読みたいと思う。

なお、主人公Samは、この後も戦闘に参加し、瀕死の重傷を負う。だが、奇跡的に回復し、また戦功によって、中尉に昇進し、帰国後、勲章まで授けられる。主人公が英雄になる一方で、原作者Richard Marshは、この「Sam Briggs Becomes a Soldier」シリーズ連載中の、1915年8月9日に他界している。 罫

【注】

- 1) 《小説月報》は、東豊書店1979年10月影印《小説月報 自創刊號起至廿二卷十二期止》を使用した。影印本は奥付が無く、発行年月日は『清末民初小説目録 第4版』(樽本照雄編,2011年3月31日)による、以下同。そして、同文については、拙作「《與子同仇》の原作」(『清末小説から』第98号,2010年7月1日)17頁でも言及した。
- 2) 拙作「《滑稽小説 紙牌》の原作」、「《蔓陀羅克》の原作」でそれぞれ採り上げた『A Pack of Cards』、『Mandragora』の作者でもある。なお、珍しいと思ったので、拙著『清末民初翻訳短篇ミステリ論集』(清末小説研究会,2010年5月1日)に収めた際、前者の方に肖像写真を掲げておいた(92頁)。Marshについての参考文献は、これら拙作も参照。
- 3) 他にもSam Briggsを主人公にした短篇が、Strand誌Vol.48-No.284(1914年8月)に、『Looping the Loop An Adventure of Sam Briggs』なる題名で掲載されている。原作者のお気に入りの一人だったのだろう。
- 4) 前掲『清末民初小説目録 第4版』は「冷風」に誤る(W0811*)。なお、《中国近現代人物名号大辞典》等には、惲樹珏の筆名として“冷風”を挙げる。これも“冷風”の誤記ならば、自分の筆名を2つ並べたことになる。また、後出の《獻身君國》、《戦事真相》は“鐵樵”だけになっている。惲樹珏の単なる気まぐれであろうか。

【参考文献・ホームページ(HP)】

陳玉堂編著《中国近現代人物名号大辞典》浙江古籍出版社,1993年5月

梁淑安主編《中国文学家大辞典 近代卷》中華書局,1997年2月

Callum James 「Why Was Richard Marsh」 『Wormwood』 14,Tartarus Press,2010年4月

Scot Peacock(Project Editor) 『Contemporary Authors』 Volume215,Gale,2004年

William G.Contentto管理HP 「The FictionMags Index」

<http://www.philsp.com/homeville/FMI/0start.htm> (2011年6月30日確認)

(わたなべ ひろし)